

十月九日

午後研究室に広島の平岡さん、プノンペン・ウナロム寺院ひろしまハウスの小笠原さん来室。元気な小笠原節を久し振りに聞く。地雷で足を吹飛ばされた人の手動の三輪車でワールドツアーを企画しているとの事。日本の各自動車メーカーにあいさつ廻りをし、資金援助依頼もついでにしているとの事。この人の楽天的な前向きさは誠に貴重だ。見習わなくてはいけない。勧進聖というのはこういうスタイルだったのかと想わせるな。重源なんかもこんな風に吹きまくって、すいと錢を出せと手を出したのだろうと思う。それが板についていてイヤ味が無い。俺はまだその域に達していない。モジモジしてお金下さいなんて言うのが我ながらセコイ。しかし小笠原さんみたいな人は日本にはいなくなつた。六〇年代ヒッピーの生き残りだ。化石が歩いてる風がある。

小笠原さんから最新のひろしまハウスの現場写真をいただく。最上階の巨大な仏足も出来上つていて仲々に良い姿になつていて。仏足まで数えると七階建の大きさになつていて、これではウナロム寺院の大僧正がもう少し低くならんかねと言つたとか言わないとかの話も、成程ねと思わせる。チョツと元気でた。いい建築を作っているという実感がある時はイヤな事がいくらあつても大丈夫。

しかし、ひろしまハウスの現場はまことにゆっくり進んでいるのだが、本来の建築はこれくらいのスピードでたてるのが理想な

のではなからうか。この現場は院生も含めて実に様々な人間が図面を引継いでいるので、単純に秩序立っていないのも何か自由な感じが出ていてイイと思う。

内外のレンガ積みもこの自由な感じを拡張できれば良いのだけれど。水まわり棟の形も大体まとまってきたので小笠原さんがプノンペンに帰る十七日には図面を託せるだろう。

椅子の模型がでそろい始めて、古代エジプトの書記像をモデルにしたのも、今度はうまくいきそうだ。院生に椅子の模型作りと図面を描かせたのはどうやらうまくいった。材料と実物の肌ざわりの感じを手中に入れさせるのには、どうやらこの方法が一番だと思う。しかし、寸法入りのスケッチを六脚分つくるのは骨がいった。チャールズ・レニイ・マッキントッシュは大変だつたらうと恐れ入る。あのころの建築家たちの作図能力と比べれば、今の時代の建築家のそれは赤子同然だなコレワ。近代建築様式のシンプルさの素は建築家達の作図能力の減退にも原因があつたんじゃないか。アドルフ・ロースの一八九八年の椅子なんか見ると、装飾は罪であるなんて良く言うよって感じなのがおかし。椅子そのもののフォルム自体が装飾的なのだ。アドルフ・ロースの椅子とマッキントッシュの椅子は同時代のものをくらべてみてマッキントッシュの方に分があるな、圧倒的に。

椅子のデザインからその建築家の建築を眺めわたすなんてのも面白いかも知れない。

十月十日

雨の中を伊豆松崎町へ。スーパービュー踊り子の階段教室みたいな座席がひどく居心地悪く、この車輛デザインは失敗だな。夕方松崎着。つづら折りの丘を登ってサンセットヒル松崎へ。いつ

もの二二一号室。つまり職員の前室である。この貧乏らしい部屋が何故か居心地が良い。温泉にも一番近いし私には一番だ。役場から来ている支配人から最近の松崎情報を聞く。再び暗雲が漂ってきた風がある。十一月の町長選は三人が乱立して、行方定まらぬと言ふ。私の仕事の伊豆文の再生も議会から色々と言言が出て、森秀己さんも苦労しているようだ。

七時、いつもの通り、森、小林が集まってくれて食事。依田敬一町長時代からすでに二〇年以上の付き合いだが、皆少し年をとった。ハンマは十一月まで漁に出ていて不在。それ故にトシちゃんも欠席。やっぱり近藤二郎さんの倉の改修をいそがないとけないねこれは。有為な人材が集まる場所が今は無い。依田さんが亡くなって町は灯が消えたまんまなのだ。英才が居なくなつて、居る時には解らなかつた存在感が年を経るにしたがつて大きくなる。食事も早々に引上げて休む。

十月十一日

朝六時半温泉につかる。体に少し力が戻つていようような気がする。松崎町のおかげだ。朝食をとつていたら余りの人の少なさに驚いた。全館六〇七室しか入っていない。観光でやつてゆくしかない町にとつては辛いだらう。かと言つて速効薬もあるわけは無し。

岩科学校を創設した明治初期にこの町は一番輝いていたと思うが、依田町政はそのルネッサンスだった。かつて津野海太郎が松崎町のまちづくりの骨格は復古であると言ひ抜いたことがあつたが名言だった。高校生の頃、大きなリュックサックを背負つて伊豆半島を一周した事があつた。まだ道路も完備されておらず、海沿いの細い径を歩いた。今思えば岩地集落のあたりだつたらう、

激しい嵐に会つて民家の納屋にもぐり込んで避難していたら、その民家の人が声を掛けてくれて、座敷に上らせてくれた、いろいろの火にも当たらせてくれた。あつたかいフトンで休ませてくれた。名も知れぬ高校生にあれ程までの底知れぬ親切が松崎町にはあつた。西伊豆は陸の孤島だと言われていた頃のことだ。次々に道路ができて、歴史の流れから言えばその新しい道路沿いに伊豆の長八美術館は作られた。依田敬一の仕事だった。陸の孤島と呼ばれ、不便だった頃の西伊豆は本当に美しかった。人の気持ちもおだやかで情に厚かつた。私達の仕事はなんだつたのかと深く疑う。戦後五〇年、アメリカ文明化のツケが今噴き出ているような気がしてならない。ノスタルジーには強い構造がある。歴史学とはそのノスタルジーを構造化しようとする意志に他ならぬ。私の松崎町での仕事の数々はあの時の岩地の幾晩かの宿泊代みたいなものなんだと思う。

朝の役場での打ち合わせは、東京からのスタッフの図面届けが遅れて十一時になった。三才にもなつて汽車に乗り遅れましたじゃネエだらうバカヤローが。今のガキは学生気分が抜けるのに時間がかり過ぎる。

時間にアキができたので近藤さんの倉へ。佐藤健の方の倉は二階の東側の部屋に畳が入つていて、これなら泊まれる。私の方の倉も、伊豆文の仕事が動けばスタッフが泊まれる床を確保しなければならぬので、二階の床づくりを急がなくてはならない。しかし、便所だけは二つの倉の間に作らなくっちゃならんだらうなコレフ。人間は喰つてクソして寝る動物でもあるからな。

役場で打合わせの後、小林の店小軒でソバを喰う。ケーキ屋フランボワーズの亭主と奥さんが来ていて、亭主とは初めての話しをした。朝役場に行く前に店でコーヒーとモンブランをごちそう

になっていたので丁度良いめぐり合わせであった。

夕方の汽車で東京へ戻る。遅刻して来たスタッフの松本が馬鹿面して眠りかけているのが眼ざわりであったが、これはもうガマンしなくてはならんのだろつ。ガマン、ガマンの日々なのだ。一将成つて万骨枯れるどころじゃないぜこれは、万骨だらしくなく生き一将枯れるだ今は。我ながら、ひどい馬鹿共を養なっているなと痛感しつつ東京へ戻る。さらに松本の下で働いているマネ事をしている大バカ共はその現実をおして知るべし。冗談じゃないぜこの現実は。

大学の研究室では本物の設計が教えられぬ、しかも日本広しと言えどもそんな事、すなわち大学で設計らしい設計をやっていたのは私のところだけだったのだが、遂にそれも落城して、私は仕事場を私の家の地下に移した。そこで教育と設計を両立させようと試みている。しかし、今のところは絶望的だな。院生は涯しいばかりが多いし、これは経験を積みれば何とかなるといふ類の問題ではないように思う。年々歳々院生の生活の質は下落しているし、ましてや学部生なんかは大半がブタがゴロゴロ寝ているようなモノなのだ。大学はすでに養豚場になつたか。養豚場なら最期は殺して肉にしてしまえば良いのだが、さすが大学ではね。